

## マルチチャンネル反射法探査から得られた相模湾の浅部地殻構造

## Shallow crustal structure in the Sagami Bay obtained by multi-channel seismic reflection survey

# 山下 幹也 [1]; 木下 正高 [2]; 岡野 正 [3]; 高橋 成実 [4]; 金田 義行 [5]

# Mikiya Yamashita[1]; Masataka Kinoshita[2]; Tadashi Okano[3]; Narumi Takahashi[4]; Yoshiyuki Kaneda[5]

[1] 海洋研究開発機構; [2] JAMSTEC; [3] 海洋科学技術センター; [4] 海洋機構・IFREE; [5] 海洋機構

[1] JAMSTEC; [2] JAMSTEC; [3] JAMSTEC; [4] IFREE, JAMSTEC; [5] JAMSTEC,IFREE

相模湾はフィリピン海プレートの沈み込みや伊豆 小笠原弧の本州弧への衝突が起きている地域であり、関東地震の震源に近く周辺のテクトニクスを解明する上で重要な地域である。相模湾では堆積速度が速いため、浅部地殻構造中に最近の地殻変動の履歴を残していることが考えられる。そこで海洋研究開発機構では相模湾において2005年4~5月にかけて高密度シングルチャンネル反射法探査を実施した。詳しい内容についてはすでにKinoshita et al. (2005) や山下ほか(2005, 2006)で報告しているが、本研究ではより詳細な解釈に加え、さらに「うらしま」を用いたサイドスキャンソナーの結果や地殻熱流量との対比を行う。

これまでの調査から相模トラフを中心に堆積層が厚いことが知られており、沈み込むフィリピン海プレートの上面は明瞭には捉えられていない。そこでより深部の構造と速度構造を得るために2006年2月に海洋調査船「かいよう」を用いたKY06-01航海において18チャンネルのマルチチャンネル反射法探査を相模湾で実施する。この航海では2基のGIガンを使用することによって高解像度のデータ取得が見込まれており、本発表では暫定的な解析結果を紹介する。18chのストリーマを使用することで、厚い堆積層の速度構造を決定することが期待できる。また前航海の測線を補うようにシングルチャンネル反射法探査も実施しており、それらを統合したより詳細な構造も紹介する予定である。